
ピヨピヨ金城 ~今、空へ立つ！~

和呼之巳夜己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピヨピヨ金城 ～今、空へ立つ～

【Zコード】

Z8024E

【作者名】

和呼之巴夜(一)

【あらすじ】

その雛は生まれながらにして呪われし魔剣ルーザヴァアを持つていた。そんな雛ピヨピヨ金城が世界を救うため、東西南北旅に出る！ 本当は大切なおじさんを殺されたから復讐するつもりだったけど。ピヨ金の仲間も個性豊か！元ヤンキー風の鳥ダンピヨ金のガールフレンドピヨ子この一人を仲間に、謎の怪鳥軍団ロードをぶとばせつ。切り裂きジャックは殺しません！、アルティメットインビンシブル暴力女に続く第三弾は雛の冒険物語だつ！

プロローグ1・2（前書き）

地獄をみた彼は、この世界も地獄にしようと塔の階段を上る。

プロローグ 1
2

プロローグ1・・・破滅の階段

乙未歷2531年

2月19日午前12時開幕

ノシ・・・・ノシ・・・・ノシ・・・・。

「詰が」は無言で笑った。そして一階たに口を開いて笑へと階段上から消えた。最後に言つた言葉はたぶん

「それで」の世も終わりだ。『』の平和の地と呼ばれた『』も地獄となろう。三十年前の楽園、ティアカツサと同じく……。ふふふふ。我的極楽の時間を長く続けてくれよ。そうすれば、神に誓い役もいないと面白くない。そうだな。呪われた剣を生まれながらに存在となるのだから。まずは天空の白の城主を配置につけよう。主して持つ・・・良いではないか。もちろん仲間もいた方がいい。おお。お決まりの裏切りもなければ。ふむ。悪くはない展開ではないか。」

・これが。・・・・。これが全ての元凶の元であつた。これが・・・

そして別の時間の別の場所、神木バスカヴィルで。主役はこの世に

生を受けた。この瞬間、主役は生まれたのだから。

次の日の新聞ではこの驚異の噂が世界的規模の新聞社、ピヨ四新聞の記事にされた。それは伝説から始まっていた。

・・・・・「伝説」

その昔、鳥たちは、絶滅の危機に瀕していた。邪悪な魔物と呼ばれる怪鳥軍団ロードによつて破滅の寸前に追いやられたのである。長蛇の怪物イパヴァも参戦していた。そんなとき立ち上がつたのは伝説の勇者、バスカヴィルである。ロードのリーダーヴィアソン・ルーザヴァーと七日間にも及ぶ一騎打ち『聖戦』の末勝つたのはバスカヴィルだったが、その三日後、重傷によつて死んでしまつたのである。そしてバスカヴィルが命を懸けて守つたその血を鳥たちは生地とたたえ、神木町バスカヴィルが出来たのである。

そしてその一方で、ロードのリーダーヴィアソン・ルーザヴァもまた、息を引き取つたのは三日後であつた。リーダーを殺された恨みで、暗躍する鳥たちもいる。闇に潜み、ヴァスカビルの仲間を殺していくのだ。その生け贋の血で、ヴィアソン・ルーザヴァは復活するという。

と言つ伝説がある。それを救うものはいないので。ピヨ四新聞はその勇者をバックアップしたいと思つてゐる。もし、いるなら、我々を助けてほしい。バスカヴィルに永遠の平和と愛とを・・・

オルフェイス「真実」第一章より

それは一つの物語であり、物語ではない。・・・・・真実とは虚となり、常に牙をむくものなのだ。信じるのは自分次第。信じられるものもまた、自分次第。嘘が本当で本当が嘘でもある。信じられるのは・・・・・自分だけ・・・・・これが、わたしはこの世界の、捉だと思う。おそらく、真実の捉だと・・・

世界の真実は知つても虚しいままである。世界は醜いから。また、醜くしたのも、自分達だから・・・・・これが、真実であるのだ。

誰がどうこういつとこの事実だけは、変わらないのだ・・・。これらが
ら変えていけるようなものではないのだ。どうあがいても・・
この世界は変わらない。恐怖が近づいているのも知らないのは自
分だけなのかもしね。

プロローグ2ピヨピヨ金城生誕

俺は日記を開いた。そしてまだ書いていない今日のことを書き記し
た。

一羽の赤子についてである。

バスカヴィルに赤子生誕

本日生まれた赤子は、みると絶叫した。母親も例外ではなかつた。
子供が産まれたといふのに母親は

「こんな子供いらないわ。捨ててちょうだい！」

と語つた。その子供は、保育施設に預けられることになつたのだが、
どこの施設も預かるとはしない。皆怖いのだ。赤子の額にある魔
剣、ルーザヴァアが・・・。英雄バスカヴィルをしに迫いやつた一番
の理由、それはヴィアソン・ルーザヴァアの持つ額からのびる剣であ
る。

そのルーザヴァアが付いている子供は殺される運命となつた。そう言
う運命の元に産まってきた子供なのだ。

その子を俺は引き取つた。どんな運命になろうとも。俺はその子を
哀れみ、引き取つたから。この子の名前はピヨピヨ金城。

そこで男は日記を書く手を止めた。その子供がが泣き出したからで
ある。その子こそ、男が日記に記したピヨピヨ金城であった。その
ピヨ金に最悪の日が来るのは日前だつた。そしてその日前の火に真
実を知るのは大きく成長した赤子だった。

プロローグ1・2（後書き）

次回より本格スタート！

第一章 ロード襲来！小父さんの死（前書き）

彼の名前はピート・ペニンスキー。それを育てたのは、ルービスといつ野であった。あれから行く年もの年月がたち、ピートは少年へと成長しているのだった。

第一章 ロード襲来！小父さんの死

一章・・・・・ 小父さんの死 ロード襲来！

あれからはるかなときがすぎたある夜、悲劇は起つた。
ピーンポーン、ピーンポーンと、何度も小父さんの家のチャイムが
なつた。小父さんはピヨ金に「隠れているように。」と言ひ残して
玄関に向かつた。まるで悪いやつが来ているかのように。小父さん
がドアを開けると、いきなりギラリと光る刃物が小父さんを刺した。

「死ね。ルービス。」

ルービスと呼ばれた小父さんはドアから入つてきたロードの手によ
つて、殺された。隠れていたピヨ金は、簞笥の隙間からそれを見
しまつた。たつた一人の最愛の小父さんが殺されるのを。それを
目撃したピヨ金は息を呑みに呑みで飲み込んだ。

「小父・・さん？・・・・小父さんが・・。」

ピヨ金の頭が真つ白になつていると、ロードの一羽は意外な事を言
い出した。

「あの、伝説の魔剣ルーザヴァを持つ「ピヨピヨ金城」は、いつた
いどこにいるんだ？」

俺を探している。この俺、ピヨピヨ金城を・・。

「仕方ねー。城に帰るか。」

と帰つていつたとき、地図を落とした。うつかりしていたのだろう。
それを聞いた、ピヨ金は、その地図を拾つやいなや城へと急ぐのだ
つた。夜の冷たい夜風の中ピヨ金は翼を開くのだった。天空の城に
向けて。ピヨピヨ金城は、自分が飛んでいることに涙した。いつま
でも飛べなかつた自分が今こうして飛べるのも、おじさんが丁寧に
教えてくれたからだつた。飛べるようになつてからと言つもの、お
じさんは人目を気にせず、一緒に「おーきんぐ《ワインキング？》
と言つものを一緒にしてくれた。それを今ふと思い出し、空には、

ピヨ金の涙が舞うのであった。

「小父・・・さん・・・。」

ピヨ金は天空の城へと、飛び立つのであった。

第一章 ロード襲来！小父さんの死（後書き）

次回、不良ヤンキー、ダン現る？ピヨ金の登坂をみたダンはピヨ金に決闘を言い渡すが・・・。

第一章 天空の城へ！ダン現る（前書き）

今思つたんですけど、ピヨ金つて離なのに何で飛べるんでしょうか
？疑問です。

第一章 天空の城へ！ダン現る

二章・・・・・天空へ！ダン出現

僕の横で天空を優雅に飛んでいる。これが誰かって？そんなことか。ヤンキーの頭領、つまりリーダーだ。鳥なのだが、頭はリーゼント、口には相当年季の入ったパイプと、きているものは、黒く長い羽織物に、喧嘩上等のゴシック文字。こんな柄の悪い服、ほかにほどこにも無いだろう。100%。特注だろうか。お手製だろうか。・・・・え？こんな事が聞きたいんじゃないって？あっ！そうか、みんなが知りたいのつてもしかて、僕が、ダンと知り合つたわけ？なーんだ。それなら簡単。それはバスカヴィルを出た一日後。当然無く飛んでいると見た事も無い鳥達に囲まれてタ。それが、ダンの率いるヤンキー集団ウインダーだつた。たまたま持つていた、いや、この場合付いていたが正しいのかもしないけれども、これまでのだけで邪魔だつた鷄冠のルーザヴァを見て、「こいつが、新しい頭だ。」と言つた。そしてむかつくんだけど見るからに貧弱そうだつて言つて、修行を手伝つてやるとか何とかいつて、付いてきた。行き先が天空の城だ。といつて、場所を知らないかとたずねたら、それはなおさら付いていかねば！といつて、ダンが付いてきた。ま、天空の城つて恐ろしそうだから、ダンみたいなやつがついてきてくれたら戦いがあつてもらくだらいいだろうと、ダン一人だけ付いてくるのを許した。そして現在に至るのですが・・・・・・・・・。これがたぶん皆さんの知りたいことだと思うんですけど。

ボーグとしていた僕の事をダンがつづいた。

「あれが、天空の城に行きたつた一つの方法だ。どうする？いつちよやるか？」

といしながら、腕を組んで、ニヤニヤしている。そのたつた一つの

はね

方法は、天空に上る階段を上り天空の城に行くというものだつた。その階段は下りる事が不可能で、しかもアンデットモンスターがうようよいと/or>うことを町で言つてゐるのを聞いたことがある。ザツザツと砂煙を上げて後ろから来ているもう一羽にダンは気づいたらしい。

何者た

「あら、せっかく天空の城に行く方法を教えてあげようと思つたのに。それしかいく方法を知らない無能な鳥達に。まあ、一般公開は天空の階段だからいいか。何なら、私が簡単な行き方、教えてあげてもいいわよ。だけど、ひとつ条件があるわ。その黄色い雛、私と一緒にデート、しましよう。それが条件よ。どう?この条件飲むのかしら、飲まないのかしら?」

】のボレ】? 初めて!! テーブルのお誘いが来た。うれしいな。。。でもそれが、天空の城に行く条件なら飲んでやる。ってゆづか】からお願いいたします。【やつ-----】

「いいよ・・・。ダン。待つてて。いじう君は?。」

「私は、ピテー。由緒正しきピテー・ピテーの鳥よ。」

金はいつまつてしまつた。

アーリン。そんな名前効いた事ないのになあ。

そして勝手に俺は、ヒヨコと手を組み合わせた。そして光輝くその一步先へ、足を伸ばした・・・・・。

この先に続くのはHAPPY ROADだ。これで永遠の幸せが・・・

E
n
d

A vertical column of 20 small black dots, arranged in a single column from top to bottom. This visual representation serves as a bullet point or list item.

「つてこんな話じゃねーだろー！和呼之 巳夜己ノ一でわけで次の
章に続くから、絶対みろよ。俺の初デートの件しなんだからー！」
以上、ピヨ金より。絶対だそうなので付き合つてあげてください。

無駄に興奮しているこの馬鹿雑に。和呼之巴夜口よつ本当にすみません。つきあつてくれてあげますか？

第二章 天空の城へ！ダン現る（後書き）

次回は「テー」トなんですが、これまた「うまくいかないもんですよ。普通は。

第三章 パンダが飛べない時代。（前書き）

これは、遙か天空に難が待っていた時代の話……え。いつの時代も難つて飛ばないのである。

第三章 ピヨコの心が変わった日。

三章・・・・・ピヨコ金で、キドキ初テーーーー
僕は今ピヨ子とともにテーマパーク、ピヨ四座・ワールドにいる。
「ねえ。ピヨ金。今度は、どこに行く?」

などピヨ子としゃれた話をしているとピヨ子のその声と同時に爆音がテーマパークピヨ四座・ワールド中に鳴り響いた。その爆音と爆発で何匹かの鳥が殺された。そして爆撃の中から、黒い鳥の影が現れた。ピヨ金はとうに思った。ここにはあのルービスおじさんを殺したやつらじゃないのか……。そう思つとすぐに駆けつけたくなつたが、ピヨ子に止められた。

「あんなやばいやつ、こんなところで相手にするなんて馬鹿だけよ。今は逃げる。一刻も早くね。さあ行くわよ。」

と、ピヨ子が行つているとその中から意外な鳥が出てきた。ダンだ。付いてきてたんだ・・まさか僕とピヨ子とあんなシーンやこんなシーンの素敵な青春の一ページを見られていたのではないか。と思うともの凄く恥ずかしかつた。

「ピヨ金、大丈夫か。こんなやつら、やつちまおう・・・・行くぜい。」

「えええ?でもピヨ子が・・・ちょっと待つてええええ。ダン、STOP STOP STOP ストップ プラウ 嫌ああ。」

ほんとに駄目駄目なピヨ金であった。馬鹿である。はつきり言おう。馬鹿も馬鹿、キング・オブ・ザ・ダメ 大馬鹿。

それとは別に、ピヨ子は売店の椅子からばかばしい二人組みのことをチョコパフェ・ローストアイス・チョコアイスをペロペロなめながら冷たい眼で見ていた。極めてあほくさつと思つぐらい冷静に。なんて馬鹿なやつらなんだと思つた。「こんなやつ、任務のために……」と。しかしそんなことを言つたと知ると、口を手で押された。その時、チョコパフェ・ローストアイスを落としてしまつた。

少し床ぐんでこると、ピリ子は襲われた。

「嫌ああああああああああ。

そのローデーの一員としていた。ピッキンの鳥が「トトヤマ」と號ひらしご事をしてこるので。

正しくは「テート」である事がお分かりだろうか。このロードは自分がした事の無いデイトをこんなちび達がしているなんて許せないっ！とハツ当たりした。世代違いのハツ当たりだ。そしてピヨ金は、ピヨ子のピンチだつとルーザヴァをサッと投げた。

しかしさすかはピヨ金である。ものの見事にはすした。これまでやつてきた事が恥ずかしいぐらいに。そしてその鶏冠トリカブト、ルーザヴァアがどこに当たったかといふと・・・・・運が悪いといつてしまえばそれまでだが、それよりかわいそうである。ピヨ子のわざか3mm下に見事に刺さつたのである。そのローダの鳥は男だった。ピヨ子の3mm下とは、その鳥の股間。そこにさりくつと刺さつたのだからもの凄く痛いのである。股間に刺さるとは・・まさか・・・ピヨ金は冷や汗をだらだらとたらした。世の汗の一滴がコンクリートの地面に付くと同時に、

一不我嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
· · · ·

そしてその男は、動かなくなつた。哀れな最後であつた。かるうじて、生きてはいたが・・・。恥ずかしかつた。ロードの一軍大将とも想像も付かない哀れな。一方ダンは、ピヨ金を置いた後敵をわんさか倒した。その数およその推定200だがそれからあの悲劇が起つたので、その数+50残りのロードの残党兵、200匹

それにも負けないように、ピヨ金もピヨ子と協力して、150は倒した残り50。しかしその奥には恐ろしいやつが潜んでいた。鳥をも一口で食べる伝説の怪物「イパヴァ」伝説にも登場する蛇の怪物だつた。しかし今は蛇ではなく鳥の姿だつた。そしてそのイパヴァは、三匹の鳥をディナーにするべく奥の鳥の骨で出来た王座から、出陣した・・・・・・・・・。

「じけ・・・。小童どもをへりてやるわ。」

するすると金の元へ、体を徐々に近づいていった。それはあの伝説の蛇、イパヴァであった。

第三章 パンデミックがもたらすトート。（後書き）

次回、魔剣ルーザヴァの真相に迫れ。都下においておいて別のことやつちやいますけどね。

第四章 イパヴァ v.s ピン金 - 騎打ち・・・・? (前書き)

「データってこんなに大変な物なんですか。

第四章 イパヴァ v/s ピヨキン一騎打ち・・・?

四章・・・・・イパヴァ v/s ピヨキン一騎打ち・・・・?

「どけ・・・・・小童ども三匹をわしのディナーとしてくろうてやる。オンカラカラビシワクソワカ・・・・。」

今まで鳥の姿をしていたイパヴァが、呪文を唱えるとあらひに巨大な蛇になつたのである。

これがロードのお偉いさんの魔力なのだろうか。

「小童どもおお。おとなしくわれに食われええい。シャアアアア。」

真つ先に狙われたのはピヨキンだったのだ・・・。

ピヨキンは、魔剣「ルーザヴァ」を先ほど殺した男の股間から一気に引き抜いた。恥ずかしく仮死状態になつっていた男は悲鳴を上げた。一方ダンは残党をかたづけている。

「ウ 奥羽ウウウ 奥羽ギヤー―――わあわっわわわ」

ピヨキンはおもしろくなつてしまい剣を抜いたり刺したりする。

同じ場所に。いや。僅かに何ミリかずれていただろうか・・・。ニヤニヤと笑うピヨキン非道なヒヨコだ本当に。そしてイパヴァに向かつてその哀れな男鳥をブンナゲタのだ。

男はあまりの痛さと恥に氣絶していた。羽で股間を押されて。その羽根は赤く染まっていた。イパヴァはその哀れな男鳥を加えば生きと骨がなつているのもかまわず食べた。最期に見たその鳥の残されたパースもまた、股間を押させていた。

「な・・・なんて非道なやつ・・・。」

ピヨキンが思わず叫ぶとピヨ子は、

「お前が言つなよ！」

と力の限り叫んだ。みんなまとめて馬鹿が多かつたのであった。いや、みんな馬鹿だった。かな?そのころもダンは戦っていた。残党兵と。

「射鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼。」金死ねえええ」

ピヨ金は突如のことにもルーザヴァアをイパヴァアに向けかまえた。しかし
しそれは風のようにはイパヴァアをはずした。すると、イパヴァアは、さ
つと動きを止めた。

「」んなやつが本当に伝説の勇者でロードを壊滅に陥れるのか・・・。占い師おペタも分らん。おい。ピラ金。今回の弱さでお前は、命取りをした。この俺を殺すと企むなら、強くなれ。ピラピラ金城・・・・・。はははははははははははは。今度あつたとき、お前をロード3大幹部の名において貴様をこの世から抹殺する。」
と言い残し、イパヴァは煙の「」とく消えた・・・・・。ピラ金は恥ずかしかつた。ルービス小父さんの書斎にある本で読んだ。題は、「恥ずかしい敗北の仕方上だつたかな。そこに乗つっていた一文は「一番恥ずかしい死に方は相手に見逃してもらう事だ」・・・と載つていた。ピラ子は、まだ手に持つているアイスをぺろりとなめた。「ウンめつ」と思わず言つてしまつた。この跡で二個三個と平らげてしまつたのであつた。

僕は決めた。ダンに修行して貰おう。でもこの決断は、時間はまだまだあると思っていた僕の誤った考えだった。もうすぐあの人があいなくなるなんて。僕の前から。

第四章 イパヴァ v s ピヨ金一騎打ち・・・・? (後書き)

僕は、強くなる。大切な人を守れるようだ。

幕間 別れと修行（前書き）

突然来た彼女は、突然姿を消した。
僕に、何も言わずに。

幕間 別れと修行

ピヨヨヨ金城 幕間

修行がしたいといふとダンは、
「弱いから鍛えるってか? ピヨ金。ま、付き合つてやるよ。がんば
んな。うおおおおお。」

ガラガラと音を立て崩れてゆくピヨ金の後ろの壁。

ピヨ金の魔剣ルーザヴァをかすめる。

しかし根っからの氣弱のピヨ金は思わず、赤ん坊のように涙をもら
してしまった。【ピヨ子に見られたら……とその晩思つと、とて
つもなく死んでしまいたいような感情になつた。ピヨ金トエ後日】

【談】

「ひーん怖いいいい。」

心の中ではピヨ子を呼び続ける情けない彼氏だった。

そしてそのだらしないボーイフレンドのガールフレンドは……。
涼しげな森林にいた。

誰か来た。そう感じるとすうすうと空気を吸つて決心をすると、
「出できなさい。われに会いに来たのじやうづ。天空の城の回し者
めが。われと対等に話していいと思つておるのか。たわけものが……。
姿を現せ。それとも何か。先田のピヨ金抹殺の指令を果たせぬこの
プリンセスを貴様流のやり方で殺しにでもきおつたか? あいにくじ
やが、われが貴様に殺されるとでも。お父上のお考えになる事はい
まいちわからん。しかしわれのこの命に代えてもピヨ金はまもつて
見せるぞ。」

草木が揺れ、そして木々がその者を避けるかのよひにしてそれは
姿を現した。紙のようにも見えた。

そちか。ライディンか。とピヨ子は思つたが、彼が現れると何もい
えなくなってしまう。昔からの癖だ……。

天空の城ジユピターに居た古いころからの……。そりじや。童が

いたのは天空の城のじや。ふとライデインを見るとうつくり、ゆつくりと口を開いた。その声は小さかったが、はつきりと聞こえた。

仮面の鳥、ライデインの声が。

「来てもらいましょうか。われらが天空の城のプリンセス。ブウウヒュフグイツコ・ピヨ子様。天空の城主、フィマナ様のただ一人の実子にて、われらが天空の城の次期後継者。」

「嫌いや。」

「いえ。あなたに行く、行かないの決定権はありません。私は、フィマナ様に従うものであり、ピヨ子様。あなたに仕えているわけではありませんので。さあ。いきましょうか。」

「ヤ・・と不気味な笑いを浮かべるライデインにピヨ子は背中を捩じらすかのような寒気を感じた。その寒気の元が大切な仲間を襲うなどという事はまだ、ピヨ子にも知る所も無かつたのである。まさか追つてきてくれるなどという事も……。」

「ピヨ・・・金。」

「ああ。参りましょ、ピヨ子姫。」

「さよなら。ピヨ金

イ

「ママありがとうございました。こんな私を」

「空残烈覇。」

ピヨ子の意識はどんどん、どんどん暗闇へと消えていった。そしてその目にピヨ金が映ることなど無いだろうと、ピヨ子は薄れ行く意識の中で考えたのであった。

ピヨ金たちの前から、ピヨ子は消えた。

そしてピヨ子の居た森林はサアアアアアと誰も居なかつたかのようにまた風で草木が揺れた。

ピヨ金は、さよならと語り誰かのメッセージを聞いたような気がした。

「そら耳か……。」

それが、ピヨ子の最後の言葉だった。

そして・・・・・ピヨ子は最後まで抵抗したが、連れ去られた。そしてきずいた。彼も、私もお互いが好きなのだと。ライデインは私を、私はライデインを・・・

一方、同時刻ピヨ氣の修行中のピヨ・ピヨ金城はといつと・・・ガラガラがらがら・・・音を立て崩れて崩れる大岩は、ダンの崩している大岩の方向とは違った。まさか・・・ピヨ金は額から、修行の成果でやつと出す事の出来たピヨ氣の炎が出ていた。

「がーらがらがらー！ピヨ金、今宵一いや、貴様の命をもらひ。そして今頃われらが姫ピヨ子様は・・・おおづ。そうだ。知っていたか？お前を愛するピヨ子様はわれらがフィーマナ様のただ一人の実子だ。そして貴様の暗殺を指令された一人の哀れな女なのだよ・・・」
くははははははと高らかに声を上げるイパヴァ。

「黙れええええ！」

絶叫ともなんともいえぬ大声がその場の気を揺らした。だが、そうは言つたものの初めて知る事実にピヨ金は頭の中が無になった。

ギリリツと歯軋りをするピヨ金に対しダンは、

「やはり・・・あの女・・・最初から九代目頭領ピヨ金さんを狙つて。」

息を出来る限り大きくすつて、出る限りの大きい声で言つた。ピヨ子がはじめてピヨ金を愛してくれたから？ピヨ子が僕に優しくしてくれたから？いや。それ以前の事だ。ピヨ子は、助けるんだ。僕が・・・。

オレが、ボーアフレンドとして。僕が！――――

「違うー。ピヨ子はいいやつだ。助ける理由はピヨ子が、僕を信じて、僕を暗殺するという指令をせず、自分の意思で僕とイマまで一緒にいてくれたからだ。だから僕は、ピヨ子がしてくれたように僕は自分の意思でピヨ子を助けて見せる！そして戦わねばならないやつが、ピヨ子の両親だとしても、ロードだとしても、僕は必ず、ピヨ

子を助けるんだあ！」

もう一度と大切な人を失わないために。

ゴウウウウウと地をうならせて、ピヨ金の消えかけていた額の火炎が再び、業火となり燃え上がった。目の色すらも今までのピヨ金と違い、曇りの無いすんだ瞳になつた。その心にある思いは「自身の力でピヨ子を助けてみせる」という思いだった。そして曇りの無い眼は事實を運んできたイパヴァアただ一人に向けられていた。

「じゃ、君の出番だよ。ロード三大幹部ギルフィ」

「ふん。『お前ごとに呼び出されるくらいなら』などと思つたがフィマナ様の指令だ。仕方が無い。こいつがピヨ金か。どれ、あたしがお手並み拝見しようじゃあないか。逝きな！地獄にね。疾風セカンドコア開放。続いてサードコア開放更にフォースコア開放そしてラストコア、開放！ファイナル・オン・ザ・ライブスタート。おいで。坊や。」

バビュウン！風がうなる音。地が風を受け砂嵐を巻き起こす。ピヨ金は、急遽、力を出した。全快で。修行も始めたばかりで力加減を知らなかつたピヨ金は力を全て出した。

「魔剣ルーザヴァアコア第一開放。ピヨ気の業火発動。」

ガコンがキン、ガシャン

周りの岩がどんどん崩れてゆく。

そのどちらかの疾風はダンの手を握つた。

「おう！？強引ですな。譲ちゃん。」

ダンは勝手にその手をギルフィと勘違이した。しかしその手は実は、ピヨ金だった

「僕だ。ピヨピヨ金城だ。」

少しがつかりするダン。ピヨ金つまんねーの。」

「このまま逝こう。」

「きさまっ！死んでどうする。」

「『めん。間違えちつた。てへへ。とにかくピヨ子の所に行くよ。』

「

ペリは走り出した。疾風のペリとギルフィーとは別の方向へ。ペリ

子のいる天空の城の方角へ。僕が、ピヨコを助け出すんだ。

ଏହାରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

「金はたまつてこたもやもやとゆべ、云んだ。

幕間 別れと修行（後書き）

彼女を守りたい。僕が、守つて見せる。

オルフェウスの手記810（前書き）

物語で重要な人を、失った。

オルフェウスの手記810

オルフェウスの手記810
ピヨ年 尻が浮く月 三匹のサルが踊る日 腹踊りでハッスルう
ほっほー曜日

ロードが、村を襲う。
頭領が誰かも分らない。

私は、これから、ロードの頭領にあつてくる。
この村を守るつもりだ。そして、この記録を、後世に残そうと思う。
私は、これから行く。

ピヨ年 尻が浮く月 七頭の獅子が猫になる日 尻を高速で振つて
ウガガのギヤー曜日

結局村は、襲われた。

俺は村を守れなかつたらしい。

証拠?

証拠ならこれだ。

目覚めると俺はロードの幹部になつていた。

フィマナの呪文だ。

俺は俺ではなくなつた。

この日記はかうじて書けているが、もう少ししたらすべてを忘れるであるひ。

この手記を読むものよ。

頼む。

この俺ロード三大幹部トップワン疾風の怪力ローファを殺してくれ。

そして私の愛する骨骨族のスカルもともに。

そして、私は、村を守れなかつたふがいなさを正せる。
そして・・・・そして・・・・。

私は、疾風の怪力ローフア。

フィマナ様の三大幹部の一人。

ここでオルフェウスの手記は、終わつている。
あくまで、このオルフェウスは、作者の頭の中に一瞬入つてきて出て行つた。

果たして、このオルフェウスは、何を伝えたかつたのか・・・・。
オルフェウスという者は、いつたい何者なのか・・・・。
オルフェウスは何を伝えたかつたのか・・・・。
オルフェウスはどうなつたのか・・・・。
オルフェウスのことを知つているものは誰なのか・・・・。

「オルフェウスは、絶命したぞ。われが改造してやつたのだ。我が勢力へとな。」

ある日、フィマナが伝えに來た。
それは僕の1つの真実を知るすべを消されたのと同じだった。
オルフェウスの事を知るものはいないのか。

物語の鍵は、オルフェイスが、持つていた。

物語の鍵は、失われた。

物語の扉の先は、開かれない。

オルフェウスの手記 810（後書き）

オルフェウスの手記は、まだどこかに何枚か残されている。

残された手記を、探し出してほしい・・・。

第五章・・・・・これ一歩の近く（前書き）

ぴょい。 わみにあいたいよ。
じつしたら、君に会えるのか、誰も・・・せひ、教えてくれないんだ。

第五章・・・・・「モードマチの元へ

第一部 セレウラの元へ
五章・・・・・「モードマチの元へ

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ。

ピヨ金は走った。ダンを引き連れて。

しかしピヨ氣の業火は消えつつあった。

雨に打たれても消えないが、力を使いすぎるとぶつ倒れてしまう。

半日は動けないだろう。いや。それはバスカヴィルだけで、半熟ピヨ金は、三日三晩つてところだろうか。

プシュウウ

突如ピヨ氣の業火が消えた。
バシャツ

同時にピヨ金も倒れた。熱もある。

ダンは「よつこらせ」というと立ち上がりピヨ金を担いだ。

「こりや疲労と・・・風邪・・・だわな。」

「フヒオエフゴイヴィフオ・・・・イテつ舌噛んだあ。・・・エフ
フォウイク。」

ダンが呪文を唱えると、家が出てきた。ピヨ金を担ぎいれた。イテ
つ舌噛んだあ。は呪文ではない。本当に舌をかんだのだ。

熱のせいか、ピヨ金は、ルービスとの思い出が頭をよぎった。樂しかった、あのころの。

「お前みたいな化け物は、死んでしまえつ。」

ピヨ金は泥を全身あらよるところに塗られた。つま先から、頭まで。

全身茶色。もちろん・・・・・も。例外はない。

そのとき小父さんは不^ふ住^{じゆう}をしかつて、木にくくりつけた。

そして、未来の樹木を後にした。

そういうばくくりつけたときの姿。恥ずかしい姿。ＳＭクラブの変な気持ち悪いあの格好今でも思い出すと笑えるな。あの全裸。あれ、僕たちの全裸つて・・・そうか、羽全部むしりとつたんだつけ。苦 苦 苦 苦 苦 苦。

不^ふ住^{じゆう}は死んだのか、誰にもわからなかつた。生きているのかも。とりあえず恥ずかしかつたろうな。ふふふ。

そうだ。これは僕がいじめられたときのことだ・・・。

僕は誰かと変わつているの?以前、小父さんに聞いた事がある。小父さんは言つてくれた。お前は普通だよ、つて。でも本当は、違つたんだ。

僕のとさかは魔剣ルーザヴァアと呼ばれ、僕はみんなから邪魔者扱いされる。図書館にも言つたんだよ。「出て行け、化け物」つて言われたつけ。それはそうと新聞、調べたんだ。僕の事、僕に関する記事。僕は、捨て子だつた。小父さんが拾つてくれたんだ。

嬉しかつた。

血の繋がりも無い小父さんが、僕と一緒にいてくれるなんて。

でもその夜に小父さんは殺されたんだ・・・。

でもそれまでに小父さんからたくさんの中恵をもらつた。

ピヨ金は、小父さんに沢山の幸せと沢山の知恵、沢山の生き抜くすべ。

虐められたときの回避法。

全部小父さんが・・・

「死ね。ルービス」

ルービス小父さんの死の間の歯切れの悪い忘れられない記憶でピヨ
金は、目が覚めた……。

気が付くと田からは、大粒の水が大量に流れていた。それが涙とも
知らずにピヨ金はその大粒の水を流し続けた。
何でこの水は出るんだろうか……。ピヨ金は、考えた。
小父さんも教えてくれなかつた事だから……。
そして、とてつもなく苦しかつた。

まだ熱が……。

ふと起き上がると額からぬれタオルが落ちた。

隣でダンがピヨ金に手を置いている。一晩中起きていたのか。
ダンの手がとっても温かく感じた。思わずほつとしてしまつた。ダ
ンの手の温もりが、小父さんに似ていた。おかゆも出ていた。ピヨ
金はそれを一杯食べた。おいしくて、心にしみた。この家、どこだ
ろ……ふと思つたきつとダンが出したんだ……。ダン、不思議が
いつぱいだからな。

安心してもう一眠り……とおもつたら……ああ、五月蠅。

病人の元へ駆けつけた馬鹿共が……。

あいつらが追いかけてきた。

ふらつく頭で、ピヨ金は、立ち上がつたが、再び、倒れこんだ。

第五章・・・・・これ一歩間違へ（後書き）

君に会えるほど、わざしこ事はないよ。

第六章・・・・・ペラペラバトル開幕！（前書き）

病人に無理をせるとは一体全体何事だあ・・・。
病人に無理させる馬鹿者は一体何処のどいつだあ？

私でした。

申し訳なく思ひます。ペラペラ金城。

「めんなさい。ペラ金。

以下略

第六章・・・・・ピヨピヨバトル開幕！

六章・・・・・ピヨピヨバトル開幕

ギルフィイの声が耳を劈くような大音響で響いた。

「出で來い。ピヨピヨ金城。今度こそ、命をもらいに來た。」

命貰われるのが いやだから逃げたのに、このメス、分つてな・・・

。ばんっ！と突然豪快に扉が開いた。

「ここにいたんだねえ。さあ・・・この私と対決しなつ。」

ギルフィイが言うルールは簡単だが複雑なものだつた。ピヨ金には。ダンとピヨ金、タッグバトルをしろと・・・。

ロードの精銳ロード暗殺武装集団ロードソルジャーの期待のエース、フミルフとギルフィイのタッグ、相性抜群コンビ相手に戦えというものがつた。

返事に困っているとのつそりとあいつが起き上がつた。今まで寝ていた事すら忘れていたが・・・。あの鳥がつ・・・。

「その勝負受けましょうや。なつ。ピヨ金。」

ダンだ。ギルフィイは鼻でふふんっと笑つて言い放つた。

「決定権があるのはピヨ金だかんな。お前じやないんだ。さあピヨ金どうするんだい。」

ギルフィイはニヤニヤ笑つていつた。

僕の返事は・・・誓つたんだ。ピヨ子を助けるつて・・・。

どんなやつとでも戦うつて。絶対に逃げないつてつ。

「ギルフィイ。受けてたつ・・・。僕とダンが。」

・・・・・沈黙・・・・・・・・・

ポクポクポクポクポクポクポクポクポクポクポクポク
・・チーン！

ああああー言つちやつた。

もう・・・取り返し、付かないジャン。どうしよ・・・と冷や汗だらだらで思つてゐるビダンが、ピヨ金。絶対に勝とうなつ。と言つてくれた。だけどダン。あのね・・・・・・・・・そのフレッシュシャーが嫌なんだつてばああ。

いい加減分つてほしいよ・・・もう。長い関係なんだから。あつ。そんないやらしい関係じやあないからねつ。勘違ひしないでね。断じて違うからね！それに・・・ピヨ子がいるし。

「愚痴愚痴言つても仕方ないので後は省くぞ。」

ダンが僕はまだ書きたい事があつたのに、勝手に省いてしまつていた。

ギルフィの言つには、決定権は僕にあるんだぞといいながら、僕はまだ愚痴愚痴言つていた。まあ、ダンはこうじつやつなのでしょうがないか・・・。

なんていつてゐるとですネエ

「勝手に話が進んでいました。決定権、その他もうもの事は僕が決めるんぢやないの。ギルフィ、ダン～。とまあ、始まつてしまいましたね。ピヨ金さん。ピヨピヨバトルロワイヤル2008秋の大激闘・・・主催者等は、省きましてですネエ。第一バト・・・【どうあがいても第一バトルにしかならないんですが、こうじついたいので言わしてくださいねつ】ル・・・開幕」

「勝手に人の心除くなあああ。てか・・・はあ、あんた誰？。

「司会者、腹我^{ハラガ}タルソウ^{タルソウ}鷺牆です。」

フミルフ、ギルフィVSピヨ金、ダン

B Y 司会者、腹我豕驚牆
ハラガテルソウ

バトル開始。

「ピヨ金。初めから飛ばすなよ。せつせみみたいにぶつ倒れても助けらん無いからな。」

こくりとつなずくが、制御できるかは、分らないもとい、無理。たぶん無理。絶対無理。百パー無理。地球がひっくり返っても無理。とにかく無理。

「フミルフ。コンビネーションG - F7 - 30でいくぞ。」

「はい。ギルフィ様。ウインドウ・ザ・ハッチ開放。」

激しい風とうなる風が織り成す暴風。

このすさまじい風だけで、やられそうだ。

でも僕は、ピヨ子の事を助けるんだあ。どうだ！これでも心意気だけは、いつちよう前でい。ピヨ子のためならなんでもする。これからの中でもやうこうつまり、「彼女にフォーリンLOVE」とでも言つてやる。とまあ、話は変わるが・・・。

ピヨ金は、無い頭を使って、こんな複雑？な事も同時に考えていた。G - F7 - 30とはどんなに恐ろしいコンビネーションなのか・・・。

ピヨ金は「んなことまで考えていた場かなりでもがんばつている。そんなピヨ金に、一言言つてあげよう。「すごいね。がんばったね。ピヨ金。」ヒダンは思つた。が、いう暇は無かつた。

「フミルフ、かさきりばね風斬羽をふりおろすウウウウ、後ろではピヨ金が、S M キングト To ギルフィに捕まつたああ。おや、ピヨ金、以外にもSか、Mかあ。主人公のくせに、こんな趣味がああ。考えられないいい。」

ふんつ。勝手な事いいやがつて。ヒピヨ金が思つていて脚に激痛が走つた。いや、激痛が歩き回つた。
がくん！

ピヨ金の膝がかくんとリズムよく落ちた。まだ、なおつてなかつ・・・。

吐き気がする。頭痛もす・・・。ダン、ぴよ子、小父・・・。

ピヨ金は、意識を失つた。そして、最後に聞いた声は彼だった。

「ぴよ金、ぴよきいといいといいといいいん！」

ピヨ金には届かなかつたが、ギルフィの声もした。

今度はあんたの死ぬ順番だよ。覚悟は出来ていいるかな？仲良く、あ

「はい。ギルフィ様。電界風霧烈風羽！」

「タンは立ち上かつた。
樹海光臨碧空之裁！」

血のぬうに赤く染まつた空から、樹海が降り注いだ。

もう勝ちはないんだろ。しになよ。フミルフ、お前はあれを殺めな。

對毎は、粉々こ粉砕された。その對毎はダンの視界をふぞーだ。

「ふん、まだまだ甘いわああああ！邪道鳥。」

電界風霧烈風羽が目の前までできている事に、きずけなかつた。

ダンは、フミルフが振り下ろしたそれによつて、きりつ

は風はより
がなり衝立の岩は強く 叩きつけられた
頭から岩に激突したため、ダンの体は、血だらけだった。

・・・・・。天空の槍降。

地は染までたよくな色から 槍が大量に・・・無量大数陰でできた

「フミルフ、何とかしなあ！」
「はい、ギルフィ様。電界風！」

防御壁を張ったフミルフだつたが、槍はその防御壁をも、無効化して、降り注いだ。

「ツたく、役に立たないねえ。ハ又鞭円陣！」

鞭が槍を次々とはじき返していく。

ついに槍の雨はやんだ。

「さあて、野蛮鳥。もうネタはないのかい？じゃあ、このギルフィ様の手にかかるて、死にな。鞭石ウイップストック化鳥トレス一閃。」

石化した鞭は、石スコットと、ダンの肉体を貫いた。

ついにダンは、倒れた。

第六章・・・・・ピラピヨバトル開幕！（後書き）

次回、ピラピヨ金城、ダンの運命はいかに！
乞うご期待！

そんなに期待にも添えないけど。
というか期待する人いるんですかー？

第七章・・・♪♪♪♪-死刑執行?○「ほんわか我が家で?お休みタイム(前書き)

♪♪♪♪一寝てもそれぬても♪♪♪♪♪♪

第七章・・・ピヨピヨー死刑執行?。ほんわか我が家?お休みタイム

7章・・・ピヨピヨー死刑執行?。ほんわか我が家?でお休みタイム

「・・・・・預金。預金。」

うるさい・・・俺は、・・・・金・・・じやな・・・ぴよ・・・
城・・・・・。

これが、夢か、現実か、幻想か、妄想か、虚言か、それともやつぱり、夢なのか。はつきりいえることは、1つまだ熱は、下がっていない。超高温だ。熱冷ましシートが必要なくらいだ。現実にはそんな贅沢はしたくても出来ないのだけれど。あれ、なんか喉の当たりがヒヤツとする。でもこれ小さいなあ。贅沢はいえないか。でもあの後僕どうなったんだろう・・・。確かにこうなったんだよね。

あたり一面が、暗く暗く・・・なつていった。僕は・・・誰?何のために生まれてきた何ナノ。僕は、僕というものは、何。小父さん、これは教えてくれなかつた・・・よね。あれは誰?あれが僕?これが僕であつてあれは僕じゃないよ?ねえ。どれが僕なの・・・。
僕の意識はどこかへ落ちた。

ダン。出来れば、その喉に当てているものはもうちゅつと、うん。もうちゅつと上。ん?誰の声だ。これ。ダンの声じやな・・・!まさかっ。

「ピヨピヨ金城、およびピヨピヨ金城、従者ダン・マーカスをピヨピヨバトルロワイアル2008秋の大激闘敗北者として死刑に処す。死刑執行人として、勝者、ギルフィ、フミルフまえへ。死刑執行長剣「喉笛」を空にかざし、敗北者の元にふりさげよ。」

ダンの名前つて、マーカスだつたんだ。なんてのんきな事言つてる

暇無くて。

これが、夢か、現実か、幻想か、妄想か、虚言か、それともやつぱり、夢なのか、これではつきりしました。これは、夢です。夢ですともつ。この喉元に当たっている一つの「喉笛」も実は、ダンが乗せてくれた濡らしたタオルですとも。寝返りでずれたんだ。きっと。ダンも直してくれればいいのに。また寝ているのかなあ。

死刑執行始め

やつた。これで確定。夢なんて生易しいものではない百パーセントがつてこれは、現実か、幻想か、妄想か、虚言に決定。

僕は、妄想でこんな怖い事は妄想しないし、こんなこと体験した事も見た事も無いから、幻想でもない。

虚言つて何なのか知りもしないのでその可能性もZERO

へと落ちていった。

しかしこのおもむの世界へと落ちてゆくとせんじになつた。ついでじて業な用を慰める慰る開かい。

三

僕は見なかつた事にして現実逃避をした。しかしこのまま現実逃避すると、もうこの世界に戻つて・・・・・・これない。したがつて僕は恐る恐る目を開けた。

四百五十一

もつあほらしいネタが無い。したがつて僕は、目を閉じれなかつた。
殺される殺される殺される殺される殺される殺される殺される」「一
ろーセー れー るーう！」

「… もしていなかつた。」

業火、限界を突破した。ダンから禁じられている行動をした。

「貴様らを許すわけには行かぬ。死を持つて償うがよろしい。この罪の支払いは、そちらの命という大きな代償を持つて、償われようぞ。零次元突破ヒート、バースト。貴様ら、覚悟せい。行くぞつ」一瞬だつた。ピヨ金がまさかのピヨ気の限界突破は。それで鳥たちを殺めたのも。

そして再び、膝がカクンっとし、倒れたのも。何しろまだ直っていないのに、またピヨ氣を限界どえを重ねたのだから。ピヨ金は、再び思い出した。

「ダンは・・・。」

再び僕が起きるのはいつ何だろうか。それさえきずかずに僕は、気を失つた。

再び起きたとき、タンは僕の近くにはいてくれないのだろう。また僕は、何もせずに大切な鳥たちをも失つた。

僕つて何も出来ない。
出来やしないんだ。

ピヨピヨ金城つて駄目な奴なんだ。
ピヨ金つて。

「だ・・・ん。」

やつと、僕は目覚めた。そして僕の眼下に広がる前には死んだと思つていたダンの姿があつた。そのダンは血の通つた暖かい本物のダンだつた。・・・生きていた・・・よかつた。

ゲホッ。ゲホッゲホウ。

どうやらまだ、治つていないらしい。

「しばらくここで休むから、ゆっくり寝てな。」

そのダンの言葉でピヨ金は安心してもう一度眠りに付いた。ダンが出した仮住まいに向へと、背負われて連れて行かれた。

夢の中で小父さんが出てきた。小父さんはピヨ金に一言告げて、消えた。

「俺の復讐のためだけに生きるな。ピヨ金。お前はお前の決めた人生を歩んでいけ。俺のことはもう忘れる。俺が殺された日の事も全て。俺は、いつでもお前と一緒にいる。我が息子、俺の全てをささげよう。ピヨピヨ金城。ありがと。」

これは、小父さんが僕だけにくれたたつた一つの言葉。いや。いつだって小父さんは僕にだけ言葉をくれた。小父さんの言葉。再び目が覚めると、ピヨ金は目から水が出てきた。前回は何なのかわからなかつた涙だ。でも今度はこれが何なのか、何のために流れるのか、今はきちんとわかる。

【涙】

小父さんが教えてくれた。夢の中の小父さんが。

再び元気になつたピヨ金とダンは天空の城「ジュピター」を目指していた。

「休んだ分は、急がないとね。ダン。」

「でもピヨ金の炎は使うなよ?」

「使わないよお。あはははははは。」

笑いながら、のんびりと、僕らは目標に向かって、進んでいく。一歩一歩踏みしめ。そして、踏みしめるたびに『アリ』の元に一步一歩地被いている。天空の城は、もう目の前だ。

第七章・・・死刑執行? ほんわか我が家で? お休みタイム(後編)

じゃ、そんなわけで！

第八章・・・・・ パラボラー・天空の城へ!（前書き）

これからしばらく更新は出来そうにありません。今年、受験とやらなもので・・・。

第八章・・・・宇宙城へ！

目の前に広がる大きな城は、天空にうかんでいた。

天空の城。ジュピター。

これがつその城の名前だった。

「こじが、天空の城、ジュピター？」

ピヨ金が首をかしげてつぶやく。

「こじが、天空の城、ジュピター。」

ダンさんが首の角度を変えずに答える。

「こじに、ピヨ子がいるんだね。」

ピヨ金は脳裏にピヨ子の姿が浮かんだ。

小説の中では危険なほどにいきなり出てきた僕のガールフレンドにして、この小説のヒロイン。

デートした事。

「助けに行こう。ダン。死んでも絶対にピヨ子だけは助け出してねえ！」

羽をグーにしてダンにアピールする。

ダンも羽根をグーにしてピヨ金の頭を虐待するかのように鈍い音でガス！

すると何処からともなく、声がした。それは天空の城から来たようだ。

「待て、貴様らをこの城に入れるわけには行かない。」

天空の城の衛兵が武器を構え、降りてきた。

「貴様らにこの天空の城皇后にして時期王妃ピヨ子様を貴様らに渡すわけには行かない。ここで、死ね！」

羽を切ると刃のように投げつけた。

ピヨ金のふくふくほっぺたから赤い水が滴り落ちた。

「ひとひねりい！」

ダンがいつの間にかノシ鳥賊にした。

「さあ、ピヨ金、行くぞーう。」

ピヨ金を連れて、ダンは天空の城へと強引に進入して行つた。

しかし、そう簡単には進入できそうになかった。

ドアの前に一匹の鳥がいた。

「待っていたぞ。ピヨピヨ金城。この世に恐れられている魔剣ルーザヴァアを持つ呪われたピヨン。」

そいつは鉄仮面の鳥だった。

第八章・・・・・ ピラピラー天空の城へ！（後書き）

ଓঁ গুৰু উ উ উ উ উ উ উ উ উ উ উ

第九章・・・ピラル・ランバライティン（前書き）

ぴヨキンってどうでも良いですよねえ・・・。作者がこれって・・・。
。困難で更新しねえだらうな・・・。

第九章・・・ピヨピヨーダンvsライデイン

章・・・ピヨピヨーダン対ライデイン ピヨ金対ライデイン
ピヨ子はこの中だらうけれど、前方には、がいる。

「きたな。ピヨ金。われがピヨ子様の守護団兼友達係。ライデインだ。」

風がなびく。その風が仮面の鳥ライデインの羽毛を揺らめかせ、僕に挑んできた。身の程知らずが。このピヨピヨ金城めつ。誰に挑んでんだよ。守護団なんだらう？。僕が勝つなんて、無理なんだらう？でももう後には引けない。挑まれてしまったのだから。挑んだ分けなく、挑まれたのだから。

風が吹き荒れる。僕の魔剣もなびかせて、ダンの羽織物、ライデインの鶏冠も靡かせて決闘は始まった。

「ピヨ金、これ使って中に入つて先にピヨ子助けとけ。」

ダンが渡してくれたのは城など何処にでも在る錠前でも開けてしまう恐ろしい強盗グツツ、「せんにゅークンEX」

それを僕は使い、天空の城の長く険しい階段【ひたすら続く何処までも続く長い階段】を上り始めた。

「主を先に生かせ、自分が犠牲になる。賢い選択だ。何故ならつ・・・・・」

ライデインが消えた。

「われには勝てぬからだ。」

出てきて言葉を言うと同時に、ダンを思い切り鶏冠で切りつけた。
「ぐわっ。」

予想もしなかつた強さに、ダンは呻いた。速さと痛さに。そして、我には勝てぬからだという言葉に敏感に、反応していた。

「ここのくらいで・・・・・」

「弱音を・・・」

「吐いていて・・・」

「我に・・・」

「勝てる・・・」

「ものかつ・・・」

一言、「」と、ダンを斬りつけた。ダンの羽織物は血で赤く染まっている。その地でさえも泥に付き赤茶色になつていて。しかしダンは、傷だらけになつても負けまいとして、ピヨ金のためとして反撃のチャンスをうかがっていた。

ピヨ金は、ロードの殺戮集団相手に、鷦鷯の魔剣ルーザヴァを両手に、必死になり戦いピヨ子の元へと進もうと努力しているのだった。しかし、その実態はピヨ金がロードに負けていたのだつた。

こうして始まつたピヨピヨ金城幼年期「ピヨ子奪回！打倒フィマナジュピター攻略戦」ピヨ金は愛するものを救えるのか。そして小父さんが殺されたわけとは・・・。やっぱり道楽なんでしょうー【断定】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8024e/>

ピヨピヨ金城 ~今、空へ立つ!~

2010年10月9日23時30分発行